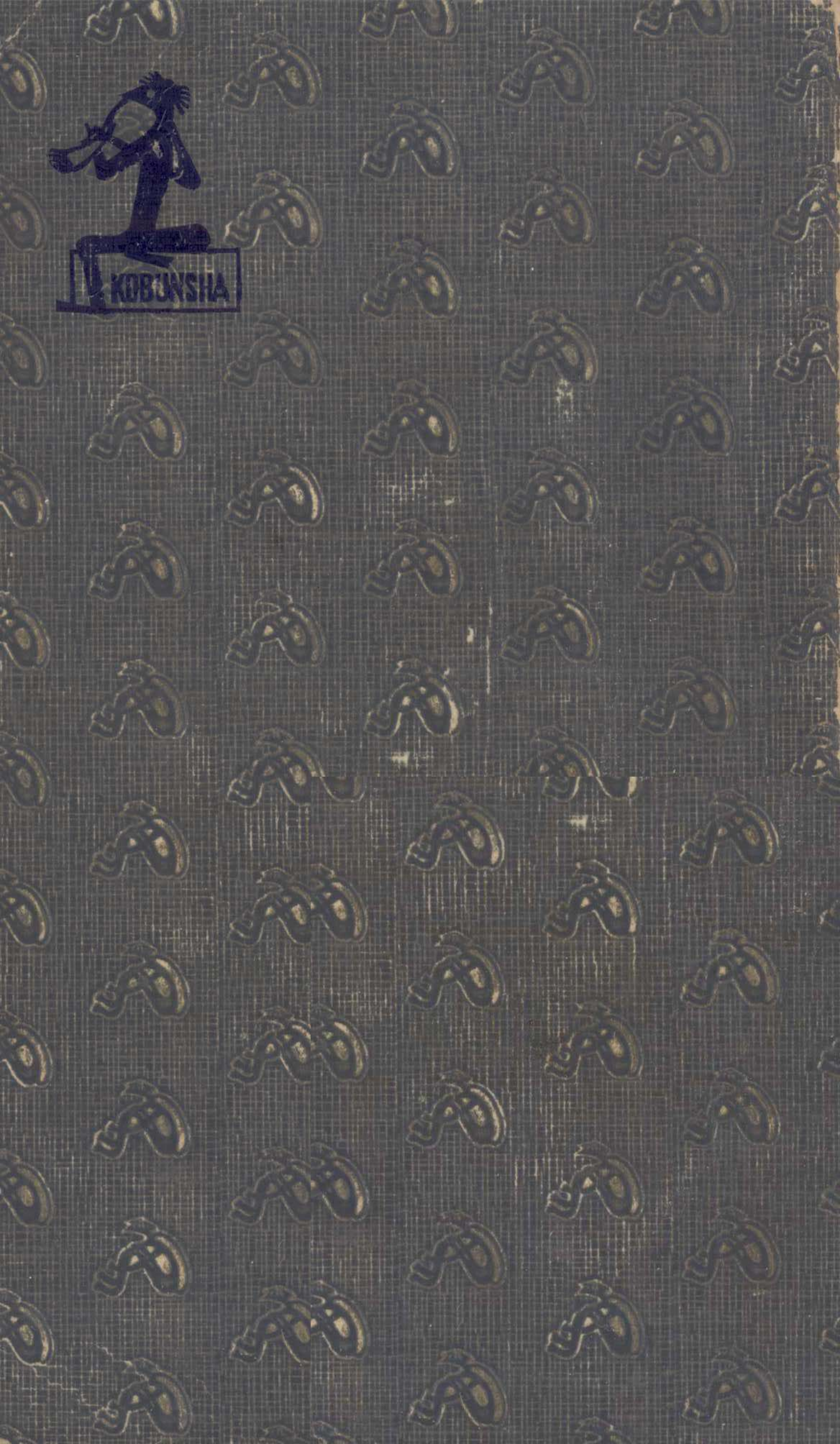




この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社

神吉晴夫

長編小説 三人の女

昭和37年4月15日 初版発行

昭和37年4月30日 6版発行

¥ 240

著者 柴田錬三郎
東京都港区芝下高輪町57

発行者 神吉晴夫

印刷者 山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷



発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

〔明泉堂製本〕

表紙の模様・意匠登録 116613

© Renzaburô Sîlata 192

三人の女

しばた れんざぶろう

柴田錬三郎



目次

1	土曜の午後の同じ時刻に	5
2	彼女たちは出発した	25
3	女の宿命は、昔も今も	45
4	奇妙な決闘の後で	65
5	中年の男たちの言葉は	85
6	感情が歪 ゆが んでしまえば	106
7	女性の演技とは	127
8	運命はつくられる	147

15	銀座は今日も流れている	294
14	愛と死の瞬間に	273
13	夜と昼のあいだに	252
12	女はじぶんを賭 ^か けてみる	231
11	幸 ^{しあわ} せは遠いか近い	209
10	今日が過去になる日	188
9	人生は齒 ^{はぐるま} 車のように	167

さしえ・鈴^{すず}

木^き

正^{ただし}

一 土曜の午後の同じ時刻に

1

鹿子木修平は、およそ十五坪もあるだだっ広い画室アトリエの片隅かたすみの古ベッドで、目をさますと同時に、むこうの壁の中央にかかった鳩時計を見た。

十時二分すぎであった。鳩は、とび出して、十度おじぎをして、ひっ込んだあとであった。

——今日は、大変運のわるい日だ。

修平は、自分に言いきかせた。

運がわるいも、いいも、この男の生活は、まことに、無為むいをきわめている。昨日も今日も明日も、一向に変わりばえはしないのだが……。

ずばらで、怠け者なまけもので、皮肉屋で、しかも、誇り高き男であった。洋画家として、識者や画商のあいだではかなり評価されているが、その属する春秋会しんじゅうかいの展覧会にさえも、三年に一度ぐらいしか、出品せず、ただ、年中、画室でごろごろしているか、さもなければ、やたらに散歩ばかりしていた。

五年ばかり前に、文壇随一の流行作家である河合正一の新聞小説のさし絵をひき受けて、一年間、毎日苦心さんたんしたのが、修平のこれまでの生涯における唯一の勤勉といえた。

その小説は、大変な評判をよんだが、その功績の半ばは、修平のみごとなさし絵にあたえられるべきであった。掲載した毎朝新聞は、その後、河合正一と修平のコンビを、再現しようとしたが、修平の頑固な拒絶で、いまだ実現を見ない。

「つまり、ぼくは、日本一の怠け者なんですな」

仕事の依頼に対するこたえは、これがきまり文句になっていた。

日本一の怠け者が、たったひとつだけ、まもっている習性がある。

それがつまり、目をさます時間の正確さであった。

十時きっかりに、ぱっと、目蓋をひらくのであった。

それが、どうかしたひょうしに、一分間はやかたたり、おそかったりするのである。二分ちがうということ、は、めったにない。

ところが、今朝は、二分間、おくれたのである。

修平にとっては、はなはだ、気分のわるい朝であった。

もっとも、二分が三十分、いや一時間遅れたところで一日に狂いが生じるような生活ではないのだが……。

歯ブラシをくわえて、庭へ出て、ものの二十分も、ぐるぐるあるきまわることから、一日が、はじまる。

この家は、東洋映画撮影所の裏手の、武蔵野のおもかげをとどめた林の中にある。修平は、その一画を、二百坪ほど買って、玄関もない奇妙な家を建てたのだが、敷地を塀でかこうことを、地主にこばんだので、およ



T. Yam.

を二千坪ばかりの林が、ぜんぶ、自分の庭みたいなあんばいとなっていた。

画室^{アトリエ}へもどって、牛乳とトーストで、朝昼兼ねた食事をすますと、またベッドへ寝ころぶか、散歩に出るか、どちらかである。新聞は、読まない。

今朝は、しかし、二分間おくれた気分のわるさで、なんとなくおちつかなかった。

「さて——」

つぶやいて、ぼうぼうと逆立^{さかだ}った半白の長髪を、かいた。

半白の髪のおかげで、五十すぎに見られるが、まだ、四十五歳であった。いまだ一度も、妻帯したことはなく、もちろん子供もない。

さて——どうするか？

どうする目的も、思い浮かばない。修平は、こわれかけた椅子いすから立ち上がると、廊下へ出た。

右が八畳の日本間、左が四坪の洋間、そして、つきあたりの階段をのぼると、屋根裏を利用した一室がある。この三つの部屋は、ふさがっている。三人の若い女性が住んでいるのである。

修平は、階段わきの板壁いたかべにかけられた黒板の前に立った。

朝はやく出て行った三人の女性たちが、それぞれ、本日の行動と帰宅時間を書いていた。

修平は、下宿屋を営業しているわけではなかった。

一年ばかり前、知人にたのまれて、やむなく、一人の女性に、長年すてておいた洋間を貸したのが、きっかけで、それから三月みつきばかりのあいだに、日本間も、屋根裏部屋も、貸さざるを得なくなったのである。

最初に貸したのが、津森華江つもりはなえといい、昭和商事株式会社の専務秘書で、二十六歳、まず典型的な美貌びぼうの持主であった。

つぎに、華江の紹介で、日本間を貸したのが、守屋郁子もりやいくこといい、東京速記クラブのベテランで、二十四歳、ややほれぼったい目蓋めがたと、ちよつとめくれぎみの小さな上唇うわくちびるが、ふしぎな魅力があり、やすやすと男にだまされそうな印象を与え、いくらだまされても、男をすこしも恨みそうもなさそうであった。

その美貌に、気品とともに、異常な勝気をしめしている華江とは、まことに対蹠たいしよてき的であった。

別の知人にたのまれて、屋根裏部屋を貸した番巴つがいともえは、その姓名が変わっているように、顔立ちも性格も変わっていた。城南大学じやうなんの英文科を出て、その大学の図書館に勤務していたが、やがては、華々はなばなしく、女流作家として、文壇に登場する野心に燃えていた。生まれてまだ一度も白粉おしろいをつけたことのない顔は、五尺に足らな

い小さなからだと程よくつりあって、外国へ行けば、十三歳ぐらいに受けとられそうであった。彼女が二十二歳であることをピタリとあてる者は、皆無であった。目と目はなれているのが、なんともいえずに、愛嬌があり、にこっとすると、どんな苦虫つぶした頑固親爺でも、ついつり込まれて、にやっとせずにはいられないであろう。

さて――。

修平の眺める黒板に、次のように、三人は、書きのこしていた。

「銀座を散歩。七時帰宅。華江」

「デート。映画を観ますから、十時すぎになります。郁子」

「今日こそ傑作を完成。帰りは不明。巴」

修平は、あごをなでて、

「ふーん」

と、鼻をならした。

三人の女性に、べつだんの変わったことも起こりそうもなかった。

実は、修平は、彼女たちに部屋を貸すにあたって、唯一の条件として、この黒板に、その日の行動と帰宅時間しじかんを記すことを命じたのである。

部屋代などは、その能力に応じて、いくらでもいい、と寛大であったが、このことだけは、きびしく実行させることにしたのであった。

まことに、修平という男は、変わっている、というべきであろう。

午後一時。

津森華江は、黒板に書いたとおり、土曜の午後の、人の出さかった銀座の裏通りを、歩いていた。

眉目びもくの際立きわだってはつきりした貌かおと、五尺四寸の均整きんせいのとれたスタイルは、行き交かう男たちを、はっとさせるに足りた。

すばらしい美貌の女性が、たった一人で、べつだん用もなさそうに、ゆつくりと歩いている光景は、大変目立つものである。

どんなすてきな男性でも、のぞみのままにえらべるくせに、わざと、土曜の午後を、所在なさそうに、一人歩きしている。これは、あまりにもプライドがありすぎて、これまで出会った男性すべてが、じぶんの理想におよばないからに相違ない。そう受けとれるではないか。

また、臆病な男性は、

——こんな美人に、恋人がいらないわけがない。

と、きめてしまうであろう。

いずれの憶測おくそくもあたっていない。

美しくかざられたショー・ウィンドーを見て歩きながら、華江が、胸のうちに抱いているのは、きわめて現実的な満足感であった。

すなわち――。

華江は、四年前から、ひそかにやっていた株が、ついに今日で目標の百万円に達したよろこびで、男性などという存在は全く眼中にない状態にあったのである。

華江は、新丸ビルの中にある会社の秘書室で、はやく正午にならないものか、とじりじりしていた。正午になると同時に、とび出して、じぶんの株をあずけてある日丸証券の銀座出張所へ、とんで行きたかったのである。

「いやに、ソワソワしているな」

ふいに、うしろから、声をかけられて、ふりかえると、専務の月田五郎が、金ぶちの眼鏡のかけで、冷たく切長の双眸を、ほそめていた。

まだ四十歳の、カミソリのように鋭く切れるこの専務は、まったく一分の隙もない英国紳士であった。昭和商事の先代社長を父にもつこの人物は、慶大を中退して、ケンブリッジ大学にまなんで、英国紳士としての教養を、あたまのてっぺんから足の爪先までつめ込んで、帰国したのである。

「君を、そんなにソワソワさせる果報な男に、会いたいものだな」

「いいえ、そんな……、わたくしは、恋人なんてありませんわ」

月田五郎は、自分の回転椅子につくと、

「どうして、君のような美人が、恋愛をしていないのだ？」

と、訊ねた。

華江が、この昭和商事株式会社の専務秘書になったのは、つい、三月ばかり前である。彼女は、それまで、

五年間も、銀座の松竹デパートの売子であった。貴金属の売場にまわされて、しばらくして、妻のために、エメラルドの指輪を買いに來た月田五郎に、目をつけられて、秘書に、ひきぬかれたのである。

華江が、専務と、私事プライベートの会話を交わすのは、いまが、はじめてであった。

「どうして、と仰言おっしゃいまして、おこたえできませんわ。好きなあいてが、あらわれないんですもの」

「そりゃ、おかしいな。君は、松竹デパートに五年もいたんだらう。そのあいだ、君は、いちども、恋愛をしなかったのか？」

「ええ、しませんでした」

「君の美貌びようにおそれをなして、みんな、しりごみをしたのかな」

「わたくし、愛あいされない女だと思っています」

「若い男たちをたじたとさせる氣品の高さが、君には、ある」

「とんでもありません。わたくしは、あまり背が高いので、ツンとしているように誤解されるのですわ」

「ひとつ、私が、誘惑ゆうわくしてやろうか」

「……………」

華江は、もちろん、冗談だと受けとって、タイプを打とうとした。

「私は、この三月間、君を眺めているうちに、だんだん、真剣な氣持になって來た」

「……………」

「私は、今日、これから、車をとばして、川奈かわなへ、ゴルフに行くんだが、君も、一緒にどうかね？　ただし、君の条件は、ぜんぶ肯きく」

その条件という意味が、華江には、わからなかった。

川奈ホテルに泊まるにあたって、部屋を別にするとか、絶対に手出しをしないとか、そういう意味か。それとも、秘密の間柄あいだがらになったあかつき、どんなぜいたくな生活でもさせるといふ意味か。

いずれにしても、この一流の実業家から、誘惑されたことは、華江にとって、わるい気分ではなかった。

ただ、誘惑されたから、すぐに、ハイとこたえるほど、華江は、バカではなかった。

黙だまって、タイプを打ちつづけて、対手あいてをいらいらさせる狡猾こうかつさも、華江は、十分意識してやってのけ、正午になると、すっと立って、

「専務さん、失礼いたします」

と、頭を下げるや、何か言いかけるいとまを与えぬすばやさで、秘書室を脱出して来たのである。

まっすぐに、松竹デパート内にある日丸証券の銀座出張所へ来て、華江は、はたして、期待どおりに、じぶんの株が、百万円を突破しているのを知って、

——今日は、なんて、すばらしい日だろう。

と、うきうきしたのであった。

華江は、その出張所の社員に、運用をいっさいまかして、月に一度ずつ、あらわれて、報告をきいていたのである。

——そうだ、今日こそは、「スカラベルタ」のあの席で、コーヒーをのむことができる。

華江は、じぶんに言いきかせた。

五年前、華江は、並木通なみきりにある高級喫茶店「スカラベルタ」の窓ぎわの席で、恋人の五木雄一いつきゆういちから別離を

宣告されたのであった。

以来、華江は、ただ一度も、「スカラベルタ」にはいらないばかりか、コーヒーを口にしていなかった。

じぶんをすてて、勤めている会社の社長の次女と結婚する五木雄一をのろって、華江は、いわば、女金色夜叉^{しや}になったわけである。

——百万円ためるごとに、「スカラベルタ」へ行つて、ひとりで、しずかに、コーヒーをのもう。そう誓^{ちか}いをたてた華江は、とうとう、その第一回の目的を達したわけである。

「スカラベルタ」は、イタリア人が経営^{けいぎやう}していて、装飾品^{そうしやくひん}はもとより、灰皿からスプーンにいたるまで、ローマからとり寄せているので、人気があった。

ドアを押して、一步はいった華江は、五年前とそのままの雰囲気^{ふんいき}の店内を見わたした。

アベックではいらないければ、気はずかしいくらい、どのテーブルも、若い男女が対^{むか}いあっていた。

華江は、五木雄一がじぶんをすてたテーブルだけが空^あいているのを見て、微笑^{ひしやう}した。ゆっくりと、かつてじぶんが腰かけたその椅子^{いす}についた華江は、

——あの時は、わたくしは、無一文^{むいちもん}だった。いまは、百万円持っている。胸^{むね}のうちに、呟^{つぶや}いてみた。

影のように近づいて来たボーイに、コーヒーを注文してから、華江は、もういちど、ひとり、微笑した。

……華江が、コーヒーを、のみ終わった時。

ふらりと、一人の青年がはいって来た。一瞥^{いちべつ}して、混血児とわかる、彫^{はり}のふかい貌^{かお}だちであった。まだ、二十歳ぐらいであろうか。

ぐるっと見わたしてから、華江に目をとめると、なんの躊躇もなく、つかつかと歩み寄った。

「失礼ですが、貴女は、まだ、ここにいらっしゃいます？」

「……………」

華江は、怪訝そうに見かえした。

ほかの席が、ぜんぶ、ふさがっているわけではなかった。

青年は、人なつっこそうに、にこっとして、

「もし、まだいらっしゃるのでしたら、まことにあつかましいお願いなのですが、これを――」

と、肩からさげていた青い鞆を、ひよいと、卓上へ置いた。それは、世界航空が、アメリカ旅行をする客に
くれる鞆であった。

「ちよつと、お預かりくださいませんか。ほんの、四、五分でよろしいんです。すぐ来ますから……」

「……………」

華江には、見知らぬ他人に、いきなり、品物を預ける青年の気持が、納得いかなかった。すこし気味もわる
かった。

華江に、即座に断わらせなかったのは、いかにもあかるい青年の態度であつたろう。

「じゃ、お願いしますね」

言いのこすと、青年は、さっさと、出て行ってしまった。

ところが……。

どうしたわけか、それから三十分すぎても、青年は、姿をあらわさなかったのである。